

インド タミールナドゥ・ダリット女性運動からの訴え バサニ・トラ虐殺の被害者に正義は否定された

インド、タミールナドゥ州のタミールナドゥ・ダリット女性運動 (TNDWM) から、4月末、驚くべき情報が届いた。1996年にビハール州のダリットの村で起きた村人21人虐殺事件の被告23人に、2012年4月17日、第二審の判決が言い渡され、一審の有罪判決(2010年、死刑・終身刑)から一転して全員放免となった。土地をもたないダリットの農業労働者たちが地主カーストに対して、せめて最低賃金を保障してほしいと強く要求したことに地主グループが怒り、集団で村を襲撃して、乳飲み子を含む21人を殺した。独立インド史上最も残忍で衝撃的な事件となった。一方、国内メディアはダリット虐待に関してほとんど注意を払わず、二審のこの判決も紙面で大きく報じられることはなかった。以下、TNDWMからの報告を紹介する。(編集)

殺人者たちを無罪放免

2012年4月16日、パトナ高等裁判所はボジュプル下級裁判所が出した死刑判決および終身刑の決定を退けた。パトナ高等裁判所は1996年7月11日に、ボジュプルのバサニ・トラでランヴィル・セナにより21人のダリットが惨殺された事件で、2010年5月、アラの一審の裁判所が23人の被告に対して出した死刑判決を実質的に覆した。

1996年7月11日、ランヴィル・セナの血に飢えた殺人者たちが、ビハール、ボジュプルのバサニ・トラの罪なき人びとを惨殺した。12人の女性と9人の子どもが血の海の中、命を絶たれた。妊娠女性のお腹は切り裂かれ、乳飲み子の舌は切れ、首は刀で切り落とされた。小さな赤ちゃんは指をすべて切り落とされた。母親の背中にしがみつく赤ちゃんも刀で刺殺され、家には火がつけられた。強姦された少女は乳房を切り落とされ殺された。

残忍な事件は午後2時、白昼堂々起きた。老若男女が惨殺されたが、警察や当局が現場にかけつけたのは事件が起きて数時間たった後だった。人びとは殺人者たちの襲撃に慄き、被害者を守ることができないまま村を逃げた。これほどの残酷な事件はインド独立以来初めてのことであった。アジャイ・シンは

10歳のプール・クマリを惨殺したことで、マノジュ・シンは生後3か月の女児の殺害で、ナレンドラ・シンは2人の女性の殺害で起訴された。彼らは一審で死刑判決を受けたが、二審のパトナ高裁で放免された。

1996年に21人

のダリットを殺した容疑で起訴された23人の被告の無罪放免は、大きな衝撃である。これは完璧な誤審である。パトナ高裁の判決は、法の支配と高等裁判の完全無欠を信じていた人びとすべてに衝撃を与えた。高等裁判所の判決は巧妙で、「証拠なし」が理由であった。しかし、プミハルは力をもつカーストグループで、土地を所有しているだけではなく、ビハール地方の政治も支配しており、法執行職員や弁護士やジャーナリストから支持されている。

ダリットたちはなぜ殺されたのか

衝突は、インド共産党が農業労働者を組織して最低賃金の30.75ルピー(日当、0.77ドル)を要求したことから始まった。地主は20ルピーの賃金しか支払わず、地元インド共産党は労働者たちにその賃金での雇用は拒否するよう説得し、地主に対する経済的封鎖を呼びかけた。

ダリットたちは土地の権利と、それら封建的地主のもとでの労働への対価として、最低賃金を求めて闘った。地主は提示金額をまったく受け入れなかった。ランヴィル・セナは1994年、ボジュプル地区のベラウル村の支配カーストであるプミハルにより、崩壊寸前の封建制度を貧しい農民の革命的運動の嵐から守ることを目的に設立されたグループである。設立以来、ランヴィル・セナはベラル、エクワリ、チャンディ、ナナウル、ナルヒ、サラタウ、ハイバスプル、ラクマンプル・バス、シャンカルビガ、ナラヤンプルの村々で、殺戮、強姦、略奪を繰り返してきた。1996年4月22日、ランヴィル・セナはナナウル村の結婚パーティに集まる人びとに銃口を向け、5人を殺した。22件の殺人事件と277人を殺害した容疑で起訴されたグループのリーダーであるブラメスワル・シンは、2002年に逮捕されたが、今は釈放されている。ビハール

州はそれ以上彼を追及する意思はないため、シンは今でも自由の身である。

一体、裁判所はどのような証拠がほしいのか? 証拠には直接証拠と間接証拠がある。報道は事件への注目を喚起するだけではなく、理にかなった論説を展開する役割をもつ。デリの裁判所がジェシカ・ラル殺人事件の被告を放免したとき、インド・タイムズは一面トップに「誰もジェシカを殺していない」というタイトルで事件について報じた。その見出しは多くの人の視線を集め、同じタイトルの映画も作られたくらいだ。しかし今、バタニ・トラ虐殺事件の被告の無罪放免を批判する新聞記事はどこにもない。テレビ討論も新聞の論説もこの事件をとりあげない。

インド社会の反映

それは今のインド社会を反映している。偏見に満ち溢れ、ダリットの命が軽視され、土地をもたないダリットの死は紙面に出てこない。無念なことに、今回の高裁判決は、権力をもつエリートが悪事を働いたにもかかわらず、彼らに呼吸をするスペースを与えた。最高裁ではこの誤審を絶対に許さず、ビハールの国家装置に職務に忠実になり、証拠提示を命じるよう願う。

被害者の家族が被告に関わる証言を行わなかったという口実のもと、事件の調査が遅れたことはなんと皮肉なことか。ビハールの多くの政治指導者たちは票集めのために、これらならず者を暗黙のうちに支持した。この灰

カーストに基づく差別、国連人権理事会の12ヶ国がインド政府に勧告

2012年5月24日、ジュネーブの国連でインドのUPR(普遍的定期審査)が実施された。IMADRを含み、インドからのダリット運動体の代表や関係NGOが多数審査会場に集まった。インドの人権状況を議論する際に、カースト制度に基づく差別は避けて通れない。現在インドには1億6千万のダリットがいる。審査をする側の加盟国政府のうち、日本を含む12ヶ国がカースト差別に関して質問を行わない、忌まわしい慣行に対処するようインド政府に提案した。インド政府は憲法を含み、さまざまな法律や措置をもってこの問題に対処していると答えた。しかし、それら法律が実施されていないことが大きな問題である。政府が是正措置を実施したり、ダリットコミュニティに配分されるべき予算を執行して

色の事実は、お定まりのインドの法律の運用と調査機関の動きを表わしている。虐殺や残酷事件は迅速な調査を必要とする。重要な証拠となる最初の情報は隠滅されてしまうからだ。その一方で、脅され、恐れ慄き、最後には殺された人びとはどのようにして殺人者を訴追できるというのか? バサニ・トラ虐殺事件と政府の対応は、民主的運動の本丸であるビハールがどのようにして民主主義の墓場に換えられていくのかを示す生々しい見本である。

州政府が即時に手段を講じなければ、ビハールは再び血生臭いカースト戦争に入るのであろう。メディアは正義と公正の問題を完全に無視した。ビハール政府は人道に対する凶悪な犯罪にこれ以上政治の茶番を続けさせてはならない、被害者に正義をもたらすため、最高裁への上訴の準備をすぐに始めなくてはならない。

国際社会に訴える

私たちはすべての進歩的で民主的な社会主義組織と人びとに対し、この民主主義のための闘いに参加するよう訴える。私たちはバタニ・トラ虐殺に責任のある政府関係者を罰するよう要求する。この闘いに勝つことができなければ、ビハールのダリットのために立ち上がる人は誰もいなくなり、ダリットたちは一切の保護装置をもたなくなる。

<タミールナドゥ・ダリット女性運動>

* 部落差別撤廃の課題を抱える
日本政府による
インド政府への意見と勧告

いるかどうかをモニターするメカニズムの不在が問題である。

「ダリットは裁判に訴える手段をもたず、ダリット虐待の犯罪者が裁かれることなく放置されているという事実は、政府のカースト差別をなくす措置はダリット被害者に利益をもたらしていないということを意味する」、ダリット人権全国キャンペーン事務局長のポール・ディバカーはコメントした。

UPRでは「カースト差別」に関連して、7項目の意見や質問がなされ、最終的には10項目の勧告が採択された。質問や勧告を出したのは次の14ヶ国であった: ガーナ、日本*、タイ、アメリカ、カナダ、チェコ、チリ、ドイツ、教皇庁、ハンガリー、ルクセンブルグ、ノルウェー、デンマーク、スロヴェニア。

「インド政府が条約機関の勧告を考慮に入れながら、子どもたちを性犯罪から守り、反差別のメカニズムを構築したことを歓迎する。教員への人権教育にとりかかったことを称賛しつつ、特定のカーストの子どもたちに対する偏見が執拗に続いていることに留意する」。その上で、「市民的権利保護法および指定カースト指定部族法の効果的実施と、指定カースト国内委員会の効果的活動のために、教育、雇用、特別警察、特別法廷の分野における割り当て制度のような措置の有効性をモニターおよび証明し、それら措置を迅速に実施するよう勧告する」。「特定のカーストの子どもたちに対する差別的扱いをなくすために、教員を対象にした人権研修を強化し、これまでの研修の結果を適切にフォローアップするよう勧告する」



ダリットに対する残酷行為